北西から見た外観

平成 29 年度
日事連建築賞受賞事務所訪問

優秀賞（小規模建築部門）

千葉・版築のいえ

［（有）薩田建築スタジオ（東京会）］

平成 29 年度日事連建築賞（小規模建築部門）の優秀賞を薩田建築スタジオの「千葉・版築のいえ」が受賞した。設計者が磨いてきた土や左官などの知識と経験、そして建築への情熱が存分に発揮された作品である。素晴らしい建築をつくり上げるのは、設計者、施工者を信頼してプロジェクトに取り組んだ建築主であることを改めて実感した。

南東から見た外観

建築主が選んだ設計者は野獣派？

東京駅八重洲口から高速バスに乗って約 1 時間、東京湾アクアラインを通って、多くのゴルフ場が開発されている房総半島中央部に向かう。市原鶴舞バスターミナルで設計者の薩田英男氏と待ち合わせて車で約 10 分、住宅コミュニティ「ミュアヘッド・フィールズコミュニティ」に到着した。

最初に全体を一望できる高台で車を降りると、建物はまばらながら、あちらこちらで工事が始まっている。その向こうにゴルフコース「ブリック&ウッドクラブ」が隣接し、眼下には湖が見える。受賞作品は、コミュニティのメイン道路から少し高くなった敷地に建てられていた。

建築主の中島健一郎氏は、毎日新聞社で警視庁キャップ、ワシントン支局長、社会部長を歴任し、事業担当常務取締役を最後に 2006 年に退社。いとこが進めていたゴルフ場と住宅コミュニティの開発会社の社長に就任し、自らも都内のマンションを引き払って移住することを決めた。

「森の中に住むのに、コンクリートのハコには住みたくない」と、友人の真鍋恒博氏に相談を持ち掛けた。東京大学の美術サークルで知り合い、建築の内田研出身。当時は東京理科大学教授で工学部長を務めていた。

「工業製品は使わずに、左官の技や地元の木材を使って地産地消の家をつくりたい。誰か良い専門家を紹介してほしい」

「心当たりが 2 人いる。1 人は繊細な女性で、もう 1 人は野獣派。どちらを選ぶ？」

「もちろん、野獣派だ」

建築許可が下りずに計画がとん挫

薩田さんは、2008 年に中島さんから相談を受けた。その要望を聞いて、直感的にフィボナッチ級数に基づく渦巻き型のプランと、敷地の土を利用した土壁をつくることを提案。「直感的に面白いと思ったね」という中島さんの反応を見て、着工を後押ししようと設計図面を一気に書き上げた。

「いやー、見たこともない図面で驚いた。土壁が 5 本もあって、家から飛び出しているんだから。よし、これでやろう！　と乗りまくったよ」

薩田さんの作戦は思惑通りに成功し、すぐに現地調査に出向いて、住宅コミュニティ開発予定地のどの場所に建てるのが良いかも決めた。ところが、調整池を含む大規模な宅地造成事業の完了検査が下りずに、計画が宙に浮いてしまう。

中島さんは、仕方がなく部分的に完了検査が済んだ 50 坪ほどの敷地に木造住宅を建てることにした。2010 年 12 月に住宅コミュニティ計画の参考にしようと、スウェーデン視察に出かけたときに、自然エネルギーで電力を 100％賄おうとする取り組みを知る。直後の東日本大震災をきっかけに、まずは自然エネルギー 100％のサステイナブルな家づくりを目指すことにした。

最初の住宅は、建築面積 12 坪に 8 坪のロフトが付いたプランで、屋根には太陽光パネルと温水器を設置。ドイツ出身で建築設備コンサルタントのオスカー・バルテンシュタイン氏に考えてもらったシステムを導入した。

お祭り騒ぎの土壁づくりに 5 カ月も

3 年後の 2014 年暮れ、ようやく宅地造成の完了検査が終わり、プロジェクトが再始動する。まず 5 本の土壁づくりから始まった。材料は周辺の土に消石灰 12.5％、セメント 12.5％を混ぜたもの。パワーショベルで練り作業ができる「コネ場」を設け、型枠の中に青竹を縄で編んだ芯と材料を入れて叩き絞め

薩田英男氏と建築主の中島健一郎氏（右）

窓からの光が庭を明るく照らす

スタイリッシュなキッチン

キッチンからダイニング、リビングを見る

ダイニングからリビングを見る

る。固まったら型枠を積み上げて同じ作業を繰り返す。

「とにかく人工のかかる作業で、関東一円から植木屋や左官屋が集まり、お祭り騒ぎでつくった。土壁づくりで5カ月近くかかったよ」

続く造作工事も、曲線の形状を丸太を使って組み上げなければならなかった。市原市周辺には、現在でも優秀な宮大工が残っていて「丸太に墨付けできる腕が良い棟梁に仕上げてもらった」という。

版築の家は、屋根の形状が特殊なので、現時点では太陽光パネルや温水器は設置していない。バルテンシュタイン氏の助言でイタリア製の薪ストーブボイラーを設置し、2トンの蓄熱水槽で家全体を暖房する仕組みを導入した。

版築のいえは2016年3月末に完成した。3年前に建てたばかりの住宅は売却済みで、今は中島さんの自宅だが、地域コミュニティの集会所としても開放。地域の字名『土太郎（どたろう）』から取った土太郎塾や食事会などを開催している。

「土壁が放射状になっているので、窓から見える景色も全て違って見えるんだ」と語る表情からは、建築主自ら作り上げた満足感が伝わってきた。

左官の世界が建築人生に大きく影響

後日、東京・文京区にある薩田さんの自宅兼事務所を訪ねた。白山通りに面した7階建ての自宅も、2006年に完成して建築雑誌などで紹介されており、地熱を利用した冷暖房システムや雨水を利用した災害対応トイレなどオートノマスな建築を目指している。

「東京のような都市で生活するにしても、持続可能性を考え、自然の中で生きることをいつも思っている」

そんな薩田さんの建築作品は、確かに明確な主張が持った“野獣派”かもしれないが、人柄はとても温厚でおおらかな印象の魅力的な方だ。そう感じたのは、大工の息子である筆者と同じ北海道出身で、大学も同じ、職人の仕事に敬意を払っているところにも強く共感したからかもしれないが……。

薩田さんは、大学卒業後、AUR建築・都市・研究コンサルタントで7年間働いたあと、2年間、イタリアのヴェネチア建築大学に留学する。この時に「古くなってひび割れた都市の面白さ」に気付き、メンテナンスフリーでピカピカつるつるな工業製品でできた建築に対する疑問を持つようになった。

バブル崩壊直前の1990年に帰国し、35歳で個人事務所を立ち上げて活動をスタート。そして、薩田さんに強い影響を与えた専門雑誌「左官教室」（2007年に休刊）を通じて、左官の世界に足を踏み入れた。

40代の時には南米のボリビアで経済支援活動として学校建設にも携わったが、この時も土を使った建築を提案した。

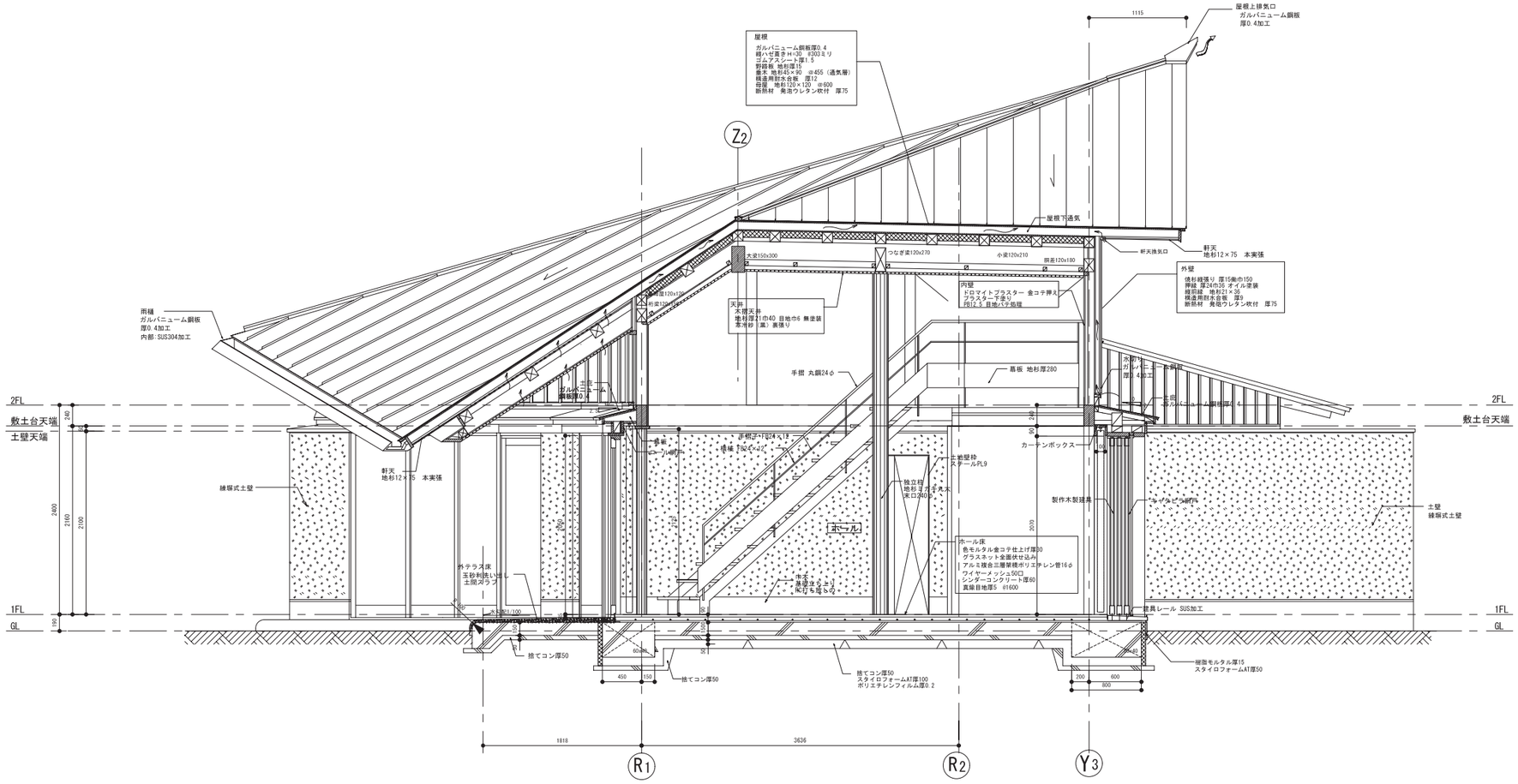
「現地の人は日本からの支援なので立派な建物をつくってくれると期待したようだが、現地で調達できない材料や技術でつくっても、壊れたときに修理できなければ困るから」

2006年に東京都建築士事務所協会主催の第32回東京建築賞で共同住宅部門最優秀賞を受賞した「keyaki house」も、外壁を左官で仕上げた作品だ。「施工を担当したゼネコンは、とても責任を持てないと言うので、左官は私が責任を持って建築主に紹介して仕事をしてもらった」

取材のあと、駒込駅近くに建つkeyaki houseを見せてもらったが、すでに10年以上が経過しても、外壁に全く問題はなかった。真っ当な腕の良い職人の仕事とはそういうものである。そうした職人の目利きができる薩田さんのような設計者は本当に貴重である。

（千葉利宏）

［プロフィール］
薩田英男（さつた・ひでお）
1955年北海道生まれ。78年東京理科大学工学部建築学科卒業、88～89年イタリア政府給費留学生としてヴェネチア建築大学留学後、91年一級建築士事務所薩田建築スタジオを設立。現在、東京理科大学工学部建築学科及び長岡造形大学非常勤講師も務める。



◎執筆者プロフィール／千葉利宏（ちば・としひろ）
経済ジャーナリスト。東京理科大学建築学科卒、日本工業新聞（現フジサンケイビジネスアイ）元記者。